青い空と赤い紙

AKIRA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
青い空と赤い紙

【Ｎコード】
Ｎ２０４１Ｂ

【作者名】
ＡＫＩＲＡ

【あらすじ】
戦争が続く毎日。愛する人が戦場に駆り出されてしまう。絶対にあなたと離れたくない。

（前書き）

この小説はテーマ小説の「色小説」で書きました。小説検索で「色小説」といれて見ると、他の方々の作品がご覧になれます。ぜひ見てください。

「お～い。崇～」
私は畑にいる崇に声を掛けた。その声を聞いた崇は手を止めてこちらを向いた。
「ん？なんだハナか。どうしたんだ？」
「いや、ただ近く通ったら崇が見えたから」
そう言うと崇は、そうか、と言って畑仕事に戻る。
「崇ったらまだ畑やってるの？どうせ何か出来たって誰かに取られちゃうよ」
崇は手を休めずに返事をしてきた。
「それでも作るんだ。親父がずっと守ってきた畑を、俺の代で終わらす事は出来ない」
「そっか・・・」
そう言って私は近くの石段に座り、ずっと崇の事を見ていた。
私は視線を空に移した
「今日も暑いね～」
「夏だからな」

――――――――――――――――

１９３９年のドイツのポーランド侵略をかわきりに始まった第二次世界大戦。
日本も１９４１年の１２月頃、本格的に戦争に参加する。アメリ

カの軍艦などのいる真珠湾に向け攻撃をしたのだ。

その後、アメリカは私たちの日本に向けて攻撃を始める。もともと力で勝るアメリカに敵うはずも無く、１９４３年、次々と日本の拠点を攻略され始めた。

アメリカは１９４５年、硫黄島に基地を置き日本への空襲を強化し、東京に向けて大規模な空襲をした。

そして今、私が１８になった１９４５年の７月の終わり。私たちのいる町も空襲が激しく、夜も安心して眠れない日々が続く・・・・。

―――――――――――――――――――――

崇が畑仕事を終わらすまでいた私。崇の横に並び家に帰ることにした。

家が近くで小さな頃からの友人である崇に、私は淡い恋心を抱いていた。そんな崇と一緒に帰れる事が本当に嬉しい。

そんな事は知らない崇が話を切り出した。

「そういえば親父が死んでもうすぐ半年か・・・・」

「どうしたの？急に」

「え？うん・・・、さっき畑で話してたら思い出しちゃってな」

「そっか・・・。早いね・・・・」

崇のお父さんは軍に入隊していた。今年の初め頃に神風特攻隊としてアメリカ軍に奇襲をかけ、そのまま骨も帰ってくること無く死んでいった。

崇のお母さんはその知らせを聞いたとき、本当に悲しんでいた。いつかはこんな日が来ると心にしていたとはいえ、愛する人がいなくなって悲しかっただろうと思う。
一家の大黒柱がいなくなった崇の家族は、長男であった崇が大黒柱となって今もずっと養っている。

「あっ、じゃあ俺んちあっちだし。じゃあな」
「うん。じゃあまた明日ね」
あの後も話をしながら帰っていた私たちは十字路で別れ、家路に着いた。

「ただいま〜」
そう言って家の中の方へ入っていくと、居間に家族が揃っていた。少し暗い感じだ。
「どうしたの？みんなして黙って集まってて」
父がこちらを見て口を開いた。

「・・・・・お父さんな、戦争に行く事になったんだ」

「え？」

意味が分からなかった。父はただの豆腐屋。軍人などではない。
「戦争に行くのは軍人さんだけじゃない。なんでお父さんが行くの？」
「もう日本軍も兵隊不足なんだろう。健康な男性はほとんど招集されるんだそうだ」
そう言って手にもっていた紙を見せた。
赤い紙に『隊ヘノ入隊ヲ命ズ』と書いてある。

「そんな！勝手じゃない！お父さんが行く事無いよ！」
「・・・しょうがないんだ。行かないと俺は国家反逆罪で殺されて、残ったお前たちにも迷惑掛けちまうんだ。行くしかない」
「そんな・・・」

沈黙が続いた。

そして父がぽつりと言った。
「近くの崇君にもこれが届いてるはずだな・・・」
「え？だって崇はまだ１８だよ？」
「１８～４０歳の男性に届くんだ。確か今年１８になるって男性にもな。可哀想に。せっかく親父さんがいなくなっても崇君が頑張ってきたのに・・・」
確かに崇は今年１８になる。
「・・・ちょっと出かけてくる！」
勢い良く家を飛び出し、崇の家を目指した。

『ドンドンドン』
「こんばんは！？崇君いますか？」
崇の家に着くとすぐにドアを叩いて言った。
「どうしたんだよ。何かあったのか？」
何事も無いように崇が出てきた。
「崇、戦争に行くって本当？」
出てきてすぐに私は聞いた。そんな事あるわけないと言って欲しかった。
「・・・もう知ってるんだ。・・・・今日これが来たんだ」
そう言ってポケットから取り出したのは、赤い紙だった。見間違うはずが無い。父に届いたのと同じだったから。

「本当に行くの？行かなきゃダメなの？」
「・・・・・・ああ、家族の事もあるし・・・・」
それを聞いた後、すぐに振り返って走り出した。

本当に戦争が憎かった。

愛している人を戦地に送られ、帰りを待っていなければならないのだ。

崇のお父さんのように帰って来ないかもしれない。

そんなの嫌だ・・・・。

でも、私にはどうにも出来ない・・・・・。

次の日、崇の畑に行った。いつもの見慣れた背中が見えた。
「崇・・・」
「なんだハナか。元気ないな」
背中を向け畑仕事に打ち込んでいる。
「本当に・・・、本当に行っちゃうの？」
「・・・ああ」
何気なく返事する崇。手を休めず、こちらを見なかった。
「やだよ！崇が・・・崇がいなくなっちゃうなんて！」
「でも行かなきゃ家族が・・・」

「行ったら、崇のお母さん達もっと悲しむよ？それでもいいの？」
「それは・・・」
崇に抱きついて泣いた。
「好きなの！・・・・行かないでよ」
崇は黙っていた。
しばらくして口を開いた。
「ハナ」
「な・・・に？」
涙目で崇を見て返事をする。
「僕もハナといたい」
振り返り私を抱きしめた。
「崇。でもどうしたら・・・」
「ハナ、僕の腕を切ってくれない？」
「え？」
「腕を切って使えないようにすれば、入隊しなくて済む」
「そんな事、出来ないよ」
「お願いだよ」
「・・・うん」
私は近くの斧を握り締めた。
そして・・・・

―――――――――――――――

8月5日。切った腕の出血がひどかった為、田舎町のここでは治療は出来ず、崇は隣の広島市に行く事になった。崇はそれで入隊は免れた。

「心配するな。僕は大丈夫。すぐ帰ってくるよ」

「うん。待ってるね」

そして崇は広島市に向かった。

8月6日　アメリカが広島に原爆を投下。死者は数万人に及んだ。

崇との連絡はつかなかった。そして二度と崇とは会う事は無かった。

―――――――――――――――

夏の日差しの強い今日、２００６年８月６日。
私は一人畑仕事をしていた。あの人が残した畑。毎年この頃になるといつも思い出すあの日。
あなたは今天国で何をしていますか？
お父さんと話をしているのですか？
もうすぐ私もそちらに行きます。
その時あなたは私に気付かないかもしれない。顔がしわくちゃだから。
でも、それでもあなたに駆け寄って抱きつきます。会えなかった日々の思いを込めて抱きしめます。
待っててくださいね。崇さん。

（後書き）

戦争の時、こんな事もあったかなと書いてみました。資料も乏しい中頑張りました。
余談ですがこの小説は前回の「紙小説」の没ネタです。
あはは・・・。
ＡＫＩＲＡでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2041b/

青い空と赤い紙

2010年10月12日21時26分発行